

ITアーキテクトに求められる新たな役割

—クラウド・SaaS時代のITアーキテクトとは—

ITの適用対象領域が拡大していくにつれ、ITアーキテクトに求められる役割も変化してきた。クラウドコンピューティング（以下、クラウド）やビッグデータの活用という最近のITイノベーションもそれに拍車をかけている。本稿では、これまでのITアーキテクトの役割の変化を振り返るとともに、今後ITアーキテクトに求められる新たな役割について考察する。

時代で変わるITアーキテクトの役割

一般にITアーキテクトとは、業務やITの課題を情報システム化要件に落とし込み、ハードウェアとソフトウェア技術を活用したITアーキテクチャを設計する人材または職種のことである。

1990年頃までのメインフレーム（大型汎用コンピュータ）全盛の時代、情報システムは事務効率化の道具として限られた領域をカバーするにとどまっていた。そのメインフレーム全体を掌握するスーパーSE（システムエンジニア）と呼ばれる人材が、各企業には何人もいた。スーパーSEが、現在のITアーキテクトの始まりといえる。

1990年代に入ると、ダウンサイジング（小規模化）の方向性の下で、オープン化（さまざまなメーカーの製品でシステムを構成すること）によるクライアント・サーバー・システムの導入が進んだ。その結果、メインフレームという統一化（全体最適化）された環境が崩れ、さまざまなシステム基盤が乱立することになった。これによってITアーキテクトは、技術をどう組み合わせる最適なシステムを構築するかというスキルを求められること

になった。

2000年以降はWebシステム（Webブラウザで利用できるシステム）全盛の時代である。標準化などによって技術領域は徐々に整理されてきたが、システムがカバーする業務領域は拡大の一途をたどり、システムの規模は爆発的に増大している。

システムが巨大化するに従って、ITアーキテクトが統制する領域は細分化が進んできた。現在のITアーキテクトは分業化が進み、企業システム全体ではなく個別システムのアーキテクチャを適正化することが個々のITアーキテクトの役割になった。その結果、企業システム全体をきちんと理解できる人材、すなわち本来のITアーキテクトがほとんどいなくなってしまったのである。

ITアーキテクトをめぐる新たな環境

このような状況でクラウドサービスが登場してきた。クラウドサービスが普及すると、システム基盤のコモディティ（日用品）化が進み、老朽化の問題が解決することになる。日用品が常に新しいものに取り替えられると同様に、ハードウェアやOS（基本ソフト）などの更新をクラウドサービスによって行う

野村総合研究所
システムコンサルティング事業本部
ITアーキテクチャーコンサルティング部
上級テクニカルエンジニア

小暮典靖（こぐれのりやす）

専門はIT戦略・システム化構想・システム化計画
の立案、IT組織改革、ITコスト最適化など



ことで、ユーザー企業側でのシステム基盤の老朽化対応が不要になるのである。

業務アプリケーション領域でも大きな変化が起きている。現在、人事や会計など、事業とは直接関係しない業務ではパッケージソフトの利用が進んでいるが、これが徐々に事業への活用にも広がっている。業種によらず共通の業務では積極的にパッケージソフトを活用しようという時代が訪れているのである。

CRM（顧客関係管理）システムなどの事業に関する業務アプリケーションを提供するSaaS（ソフトウェアをインターネットを通じて利用する仕組み）の普及も大きな環境変化である。SaaSで提供されるアプリケーションは部品化が進んでおり、それを利用すると開発生産性は通常の3～5倍になるといわれる。これによってシステム再構築の概念が根底から覆される。現在、システム再構築というと、システム基盤の老朽化対応に合わせて現行システムの改修や機能追加を行うことが多い。そのようなシステム再構築に当たり、現行システムを捨て、SaaSアプリケーションでシステムをつくり直した方が安く、早くできるのである。

企業にとって差別化要素ではない業務に対してはパッケージソフトなど出来合いの機能を活用する一方、競争力の源泉となる領域にはSaaSを活用して常に新しいシステムを構築し続けるという時代が来るかもしれない。もちろん、企業やシステムの特性によって状

況は変わるが、大きな流れとしてはそのようになると思われる。

見直されるITアーキテクトの役割

クラウドサービスやSaaSの普及、業務パッケージの利用拡大によって、再びITアーキテクトの役割が見直されようとしている。ITアーキテクトはクライアント・サーバー・システムの登場以来、個別システムの最適化に力を注ぎ、本来の役割から遠ざかった感はあるが、昨今、さまざまな技術やサービスを組み合わせさせてシステムを設計する役割を求められるようになってきた。長く“一軒家”だけを設計してきた建築家が、外部サービスの活用も含めた企業システム全体の“都市計画”まで手がけることになったのである。さらにグループ全体やグローバルの視点では、“国づくり”といったレベルでの視野の広さも必要になる。

現在、システム化を伴わない事業展開は考えられなくなっている。従って、事業構造や事業戦略を理解した上で事業を支えるシステムのあり方を考えることこそが企業システム全体の最適化につながる。意外なことかもしれないが、IT部門やITベンダーは、企業がどこでどのように収益を上げているかをよく知らないことが少なくない。今やシステムだけの知識でなく、システムが事業の中でどう使われているかを理解することがITアーキテクトにも必要なのである。 ■